



---

# 第 61 代横綱 北勝海 信芳

---

八角部屋師匠および日本相撲協会現理事長



2022 年 6 月 1 日

どすこい部屋

大相撲ホームページ-どすこい部屋-

□基本情報



<引退>

北勝海 信芳

(ほくとうみ のぶよし)

|       |                |
|-------|----------------|
| 所属部屋  | 九重             |
| 本名    | 保志 信芳          |
| しこ名履歴 | 保志→富士若→保志→北勝海  |
| 横綱在位  | 昭和62年7月～平成4年3月 |
| 生年月日  | 昭和38年6月22日     |
| 出身地   | 北海道広尾郡広尾町      |
| 身長    | 181.0cm        |
| 体重    | 151.0kg        |
| 得意技   | 左四つ、押し、寄り切り    |

□戦歴・受賞歴

幕内優勝 8回      十両優勝 1回  
幕下優勝 1回      三段目優勝 0回  
序二段優勝 1回      序の口優勝 0回  
殊勲賞 3回      敢闘賞 3回  
技能賞 5回      金星 1個

生涯戦歴：591勝286敗109休（79場所）  
幕内戦歴：465勝206敗109休（52場所）  
横綱戦歴：250勝76敗109休（30場所）  
大関戦歴：56勝19敗（5場所）  
関脇戦歴：84勝51敗（9場所）  
小結戦歴：34勝26敗（4場所）  
前頭戦歴：41勝34敗（5場所）

□番付推移

初土俵：昭和54年3月場所  
新十両：昭和58年3月場所  
新入幕：昭和58年9月場所  
新三役：昭和59年1月場所  
新大関：昭和61年9月場所  
新横綱：昭和62年7月場所  
引退：平成4年3月場所

## 1. 現役時代

### 1.1 入門前

小学生時代には既に北の富士（第52代横綱）から九重部屋への勧誘は受けていた。1977年に叔父の勤務先の社長が元横綱・北の富士（当時：年寄「井筒」）と知り合いだったことが縁で勧誘されるが、以前勧誘したことがあることを覚えていなかった。

保志は柔道で名を上げて他の相撲部屋にも勧誘されていたが母が電話で井筒に「最初に来てくれたあの部屋に行きたい」という保志の意向を伝え、翌年1978年に九重（井筒から名称変更）から勧誘され東京に転校し、この頃から九重の指導で稽古をしていた。

### 1.2 大相撲入門～大関時代

中学卒業後の1979年3月場所で初土俵を踏んだ。昭和の大横綱と言われる九重部屋の兄弟子・千代の富士との激しい稽古を重ねて強くなり、順調に出世していった。

同期には横綱・双羽黒（北尾）がいる他、後にプロレスラーとなった安田忠夫（孝乃富士）も同部屋で同期だった。

- 1983年3月場所では19歳で新十両に昇進した。  
保志と同じ北海道十勝地方出身であり、中学時代には地方に名の知れた柔道選手でもあった一年齢上の大乃国がこの場所で新入幕を果たす。同郷のライバルと言われ始める。
- 1986年3月場所  
兄弟子の横綱・千代の富士が3日目から途中休場していた。  
それに奮起した保志が13勝2敗で自身初念願の幕内初優勝を果たした。この場所では5大関（北天佑、朝潮、若嶋津、大乃国、北尾）を総撃破した場所だった。
- 1986年5月場所  
11勝4敗で、関脇の地位で3場所合計32勝を挙げたものの当時大関は5人もいたことや終盤優勝争いから完全脱落したことなどから見送られた。
- 1986年7月場所  
12勝3敗と好成績により、関脇3場所合計36勝で満場一致で等場所後に大関昇進が決定した。大関昇進伝達式での口上は以下の通り。

※北尾<のち双羽黒>の横綱昇進により6大関は実現せず。

「大関の名を汚さぬよう、これからも稽古の精進し、努力します。」

- |                               |                                         |
|-------------------------------|-----------------------------------------|
| ・北の富士…北海道旭川市出身の九重部屋所属。第52代横綱。 | ・千代の富士…北海道松前郡福島町出身の九重部屋所属。第58代横綱。       |
| ・双羽黒…三重県津市出身の立浪部屋所属。第60代横綱。   | ・井筒…日本相撲協会の年寄名跡のひとつ。現在は元関脇・坂鉾の遺族が所有。    |
| ・孝乃富士…東京都大田区出身の九重部屋所属。小結。     | ・年寄名跡…日本相撲協会の「年寄名跡目録」に記載された年寄の名を襲名する権利。 |
| ・北天佑…北海道室蘭市出身の三保ヶ関部屋所属。大関。    | ・大乃国…北海道河西郡芽室町出身の放駒部屋所属。第62代横綱。         |

✓ しこ名の由来

初土俵からの「保志」で相撲を取り続けていた。大関昇進が決まると師匠はしこ名を考えた。出身地「十勝地方」にちなんで、「北十勝」「十勝海」「十勝富士」などが候補にあがった。十勝の「十」の字は『勝ち星が 10 勝止まりになりそうでやめた方がいい』と九重が発言したことから「十勝」から読みは十（と）ではあるが字は「勝」として「北勝海」に決定。

● 1987 年 3 月場所

大関 4 場所目となった 3 月場所は上位陣総破れの中 12 勝 3 敗の成績ながらも 9 日目には大関・若嶋津を破り、14・千秋楽には大関陣（大乃国、朝潮）に敗れるも 6 場所ぶり 2 回目の幕内優勝を果たした。

● 1987 年 5 月場所

自身初の綱取りだった 5 月場所では 12 日目に当時大関だった大乃国と共に 12 勝全勝と好調だった。13 日目に初対戦の平幕・両国に敗れ 1 敗に後退。千秋楽で 14 戦全勝の大乃国と対戦するも、寄り倒されて 13 勝 2 敗と優勝次点の成績で終わった。

✓ 横綱昇進へ

15 戦全勝優勝の大乃国とは 2 勝の差があった。千秋楽後に相撲協会から横綱審議委員会へ諮問すると「横綱昇進は微妙」と報道。しかし、それまでの北勝海の稽古熱心、品格の良さが横審から高評価を得たことなどにより、満場一致で同場所後に大関 5 場所目での横綱昇進が決定した。横綱伝達式での口上は以下の通り。

「横綱の名を汚さぬよう、これからも一生懸命稽古し、努力します。」

## 2. 横綱時代

### 1.3 横綱時代



←3 度目の優勝を飾り、  
支度部屋で喜ぶ北勝海

● 1987 年 7 月場所

新横綱の場所では小結・両国、関脇・旭富士、大関・北天佑、横綱・双羽黒に敗れ 11 勝 4 敗と優勝を逃してしまった。

● 1987 年 9 月場所

13 日目まで 13 連勝と好調だった。14 日目の大関・大乃国に敗れたものの 14 勝 1 敗で横綱昇進してから初めての優勝を果たし、通算 3 回目の優勝を果たした。

● 1987 年 11 月場所

初日から小結・玉龍、13 日目に大関・朝潮に敗れたものの 13 勝 2 敗の優勝次点の成績ながらも、自身初の年間最多勝（74 勝）に輝いた。

- 1988 年 3 月場所  
9 日目に花乃湖、千秋楽に大関・大乃国に敗れた。大乃国と北勝海が同点となり優勝決定戦となった。本割と優勝決定戦で連敗を喫し、逆転で優勝を奪われてしまった。
- 1988 年 5 月場所  
終盤戦まで優勝争ったものの、14 日目に当時大関だった旭富士との取組前に支度部屋での準備運動で持病の腰痛を悪化させてしまった。翌日の千秋楽は自身初の不戦勝・休場となり、翌 7 月場所からは腰痛が回復せず 3 場所連続休場となった。



←現役時代に酒を酌み交わす北勝海（左）、  
千代の富士（中）、2 人の師匠の元横綱・北の富士

- 1989 年 1 月場所  
場所直前に発熱も重なり出場が危ぶまれていた。初日から自身初の 14 連勝と好調で、千秋楽に 1 敗の旭富士に敗れ自身初の全勝優勝は逃したものの、14 勝 1 敗同士の優勝決定戦で旭富士に勝利し、8 場所ぶり 4 回目の幕内優勝を果たした。
- 1989 年 5 月場所  
6 日目の三杉里戦、13 日目の旭富士戦で敗れたものの 13 勝 2 敗同士の優勝決定戦に進出し、再び旭富士を倒して 5 回目の幕内優勝を達成した。
- 1989 年 7 月場所  
12 勝 3 敗（安芸乃島、益荒雄、小錦）の成績で千代の富士と史上初の同部屋横綱同士の優勝決定戦で対決。敗れはしたものの、その後の相撲でも横綱として十分な強さを発揮して優勝回数も多く重ねていった。
- 1989 年 11 月場所  
初日から水戸泉戦、6 日目に霧島戦、8 日目に琴ヶ梅戦、千秋楽に旭富士戦に敗れ 2 場所連続で 11 勝に留まったが、2 年ぶり 2 度目の年間最多勝を受賞した。



←初場所初日を翌日に控えた優勝額の贈呈式  
秋場所の北勝海（左）と九州場所の千代の富士（右）

- 1990 年 3 月場所

7 日目に安芸乃島戦、13 日目に霧島戦に敗れ、千秋楽に横綱・北勝海、大関・小錦、関脇・霧島の 3 人の優勝決定巴戦となった。最初の北勝海-小錦戦は小錦が勝利。小錦が次の霧島戦に勝てば優勝だったが霧島が勝って小錦の優勝ならず。霧島が次の北勝海戦に勝てば霧島の優勝だったが、北勝海が勝ってまだ対戦は続く。次の小錦戦は北勝海が下手投げで下して 2 連勝、5 場所ぶり 6 回目の幕内優勝が決まった。

※巴戦の場合：1 力士が 2 連勝すると優勝が決まるが、2 連勝しない場合は延々と対戦が続く。

北勝海の持病である腰痛の影響が大きかった。

水中ウォーキングやマイナス 190 度の冷凍室に入る等様々な治療やリハビリを試していた。

(翌 5 月場所以降は 10 勝前後で場所を終えることが多く、雲行きが怪しくなっていた。)

- 1990 年 9 月場所

初日から琴錦に敗れ、しかしその後は 13 連勝。千秋楽にて 13 勝 1 敗の相星決戦で、当時新横綱だった旭富士を下し、7 回目の幕内優勝を成し遂げている。

- 1991 年 3 月場所

14 日目に大乃国と優勝争いトップの 12 勝 1 敗同士 (4 日目：曙) の対決で、北勝海が寄り倒してひとり 1 敗を保持したものの、この一番で左膝を土俵の俵に強く打って負傷してしまった。千秋楽も北勝海の左膝は激痛で、まともに相撲を取れない状態だったが、横綱土俵入りおよび三役そろい踏みを難なく勤め上げていた。結びの一番は横綱同士の北勝海-旭富士戦では痛めた左ひざを庇いながら旭富士に呆気なく押し出され完敗。しかし大乃国が不調の霧島に敗戦で 12 勝 3 敗となり、この時点で 13 勝 1 敗だった北勝海が 3 場所ぶり通算 8 回目の幕内優勝が決まった。※これが北勝海の最後の優勝となった。



←3 人による優勝決定巴戦

北勝海 (右)、小錦 (中)、霧島 (左)



←1989 年 7 月場所千秋楽 (千代の富士-北勝海)

史上初同部屋横綱同士優勝決定戦

## 1.4 現役引退

北勝海はこの膝の怪我をキッカケに休場が多くなっていた。

5 月場所の千代の富士の引退を皮切りに、翌 7 月場所では大乃国、翌 1992 年 1 月場所では旭富士も相次いで土俵を去り、北勝海のための 1 人横綱となっていた。

- 1992 年 3 月場所  
再起をかけて出場したものの、北勝海らしい相撲は全く見られず、初日から水戸泉、久島海に 2 連敗して途中休場した。
- ✓ 14 年の相撲人生に別れ  
北勝海は横綱の責任感からぎりぎりまで復活を目指していた。度重なる怪我はほとんど回復しないために同年 5 月場所直前で番付に名を残しながら 28 歳 10 カ月の若さで現役引退を表明した。（※横綱で廃業・死亡者を除けば栃ノ海・大乃国に次ぐ史上 3 位の早齢、大鵬が新横綱だった 1961 年 11 月場所から 30 年以上続いた北海道出身力士の横綱が途絶える。）



←平成元年初場所で二子山理事長から  
4 度目の優勝賜杯を授与される北勝海

## 3. 親方として

### 2.1 8 代「八角」を襲名

- 年寄襲名および部屋創設  
現役引退と同時に横綱 5 年特権の一代年寄「北勝海」を襲名。  
同年 10 月に八角部屋を立ち上げ、北勝力、海鵬ら関取 9 人を輩出している。また弟子の数も多く、ことに関取予備軍である幕下力士が多く所属しておりスカウト活動と育成の手腕に優れている。2000 年から 2 期 4 年監事（現副理事）を務めていた。  
※九重部屋所属の元島錦の 7 代「八角」から定年後の年寄名跡譲渡の確約があったためであり、先代八角が定年退職した 1993 年 9 月場所後に 8 代「八角」を襲名。
- 大相撲八百長問題が発覚  
2010 年に役員待遇に就任。2011 年の大相撲八百長問題で年寄「谷川」（元海鵬）と保志光（モンゴル出身・八角部屋）の関与が発覚し、谷川は解雇、保志光も引退し、これに伴う責任として役員待遇を辞任した。

- 理事に当選

2012年の役員改選で理事に当選した。広報部長、指導普及部長、危機管理部長、博物館運営委員に就任。そして同年9月26日には日馬富士の横綱昇進の伝達式で協会理事として使者を務めた。また2014年3月26日の鶴竜の横綱伝達式でも、同様に協会理事として使者を務めた。同年の役員改選と同時に行われた新たな職務分掌では、理事の序列2位である事業部長の役職を与えられた。



←新十両昇進会見・師匠と手を取り合う  
八角親方（左）、隠岐の海（右）

## 2.2 日本相撲協会理事長に就任

- 北の湖敏満が死去

2015年11月20日に北の湖敏満（日本相撲協会理事長）が死去。  
死去に伴い理事長代行に就任した。代行業務としてはこれより以前の同年7月場所千秋楽以降、北の湖の体調不良のため協会御挨拶と表彰式を代理で務めていた。

2015年12月18日に日本相撲協会理事会にて第13代理事長に選出。  
（高砂一門からは初の理事長となった。）

2016年3月28日に日本相撲協会理事会で理事長に再選された。（理事長1期目）  
【※貴乃花理事との一騎打ちになり、理事による多数決を6対2で制した】

- 元横綱・千代の富士が死去

2016年7月31日に同じ九重部屋の兄弟子だった千代の富士こと九重親方がすい臓がんのため61歳で逝去。訃報直後はショックが大きくコメントができていなかった。

「（体調が）悪いと聞いていたが、現役時から絶対に強い、負けない、必ず治るだろうと思っていた。まだ信じられない。兄弟子でしたが、もう一人の親方という感じでした。本当にお疲れ様でしたと言いたい」



←元横綱・千代の富士の葬儀が行われた  
告別式が終わり九重部屋から運び出される棺

- 元幕内・潮丸が死去

2019年12月13日に13代「東関」(元幕内・潮丸)が血管肉腫のため41歳で逝去。

高砂一門葬の葬儀委員長としての弔辞

「明るく、誠実な人柄から、弟子には慕われ、先輩親方からは大変かわいがられました。私もそういった人柄に惚れ、一回りも若いあなたに色々な相談をしてきました。その度に、あなたの言葉に助けられてきました。本当に素晴らしい人でした。自分の体の一部を失うように感じています。41歳という若さで旅立たなければならないということに、運命の残酷さを痛感しています」

- 2020年1月31日の相撲協会理事会で16代「振分」(元高見盛)が東関部屋の後継者として承認されるまでの間は、高砂一門の長として東関部屋を八角部屋に一時お預かりをして責任者となった。現在、東関部屋は閉鎖し、力士・裏方は八角部屋に移籍。



←元幕内・潮丸こと東関親方の告別式  
八角理事長が涙の弔辞を読んだ

## 4. 主な成績

### 3.1 通算成績

- 通算成績：591勝286敗109休(80場所)
- 幕内成績：465勝206敗109休(53場所)
- 横綱成績：250勝76敗109休(30場所)
- 大関成績：56勝19敗(5場所)
- 三役在位：13場所(関脇9場所、小結4場所)
- 連勝記録：20(1990年9月場所2日目～1990年11月場所6日目)
- 年間最多勝：1987年(74勝16敗)、1989年(72勝18敗)
- 連続6場所勝利：75(1987年5月場所～1988年3月場所)
- 幕内通算連続勝ち越し記録：18場所(1985年7月場所～1988年5月場所)
- 幕内連続二桁勝利記録：11場所(1989年1月場所～1990年9月場所)

### 3.2 各段優勝

- 幕内最高優勝：8回(1986年3月場所、1987年3月場所、1987年9月場所、1989年1月場所、1989年3月場所、1990年3月場所、1990年9月場所、1991年3月場所)
- 十両優勝：1回(1983年7月場所)
- 幕下優勝：1回(1983年1月場所)
- 序二段優勝：1回(1979年7月場所)

### 3.3 三賞・金星

■ 三賞：11回

- 殊勲賞：3回（1985年11月場所、1986年3月場所、1986年7月場所）
- 敢闘賞：3回（1983年11月場所、1984年1月場所、1986年5月場所）
- 技能賞：5回（1984年11月場所、1985年7月場所、1985年11月場所、1986年1月場所、1986年3月場所）

■ 金星：1個（北の湖1個）

### 3.4 主な力士（横綱・大関）との幕内対戦成績

| 力士名 | 勝数 | 負数     | 力士名 | 勝数     | 負数 | 力士名 | 勝数 | 負数 |
|-----|----|--------|-----|--------|----|-----|----|----|
| 曙   | 2  | 2      | 朝潮  | 15     | 11 | 旭富士 | 21 | 19 |
| 大乃国 | 14 | 20 (1) | 北の湖 | 3      | 2  | 琴風  | 5  | 4  |
| 霧島  | 10 | 6      | 小錦  | 15 (1) | 16 | 隆の里 | 4  | 5  |
| 貴花田 | 1  | 1      | 双羽黒 | 8      | 9  | 北天佑 | 17 | 18 |
| 若嶋津 | 13 | 9      | 若花田 | 2      | 0  |     |    |    |

※優勝決定戦で旭富士に2勝、霧島に1勝、小錦に1勝1敗、大乃国と千代の富士に各1敗がある。